

明治の初期に外来の「education」をどう翻訳するか議論があり、「教化」「啓蒙」「教育」の候補から、当時文部大臣であった森有礼の主張する「教育」に決まったそうです。私たちは教育について、この「教育」の文字から連想されるイメージをもってはいるようです。しかも、「育」（はぐくむ）よりも「教」（おしえる、くせしむ）に重点が置かれ、そこから、いつの間にか、教育とは、子供を空っぽの瓶に見立てて、そこに知識という内容を、小学校ではここまで中学ではここまでと入れていって、今どのくらい入っているかをテストするというようなイメージになってしまっているようです。それを画一的にやろうとしているのが、日本の現状のように思います。

しかし、もとの「education」は、どういう意味でしょうか。まず「e」は「外へ」を表す接頭辞です。中心となる「duc」は「導く」の意味で、conductor（引率者）、introduce（紹介する）、produce（生産する）などと共通します。つまり、「education」は、子供が本来持っているものを、外からの刺激や知識の注入によって、外へ導き出すということです。いわば、知識を入れて、それが刺激となって、すでに持っているものと重ね合わせて、知恵にして出すとでもいうようにイメージしてみましょう。つまり、教育として知識を正しく伝えるのは、知識を入れることもさることながら、むしろ出す、表現することを促すのです。そのために、考えるという習慣が必要です。ついですが、「導」の字は「寸」が手を表し、その人のところまで行って手を取って道案内するという意味です。

『無量寿経』という經典の中に、「諸の如来の弁才の智を得、諸の言音を入つて、一切を開化す。」とか「甚深の禅慧をもって衆人を開導す。」とありますが、この「開化」や「開導」という言葉こそが「education」を表すにふさわしいと思います。子供たちは、まさに「開化」されるのを「開導」されるのを待っています。

私たち人間は、様々な可能性を持つて生まれてきています。それを「火種」とか「種火」にたとえますと、私たちはそれが炎となって燃え始めると、特に促されなくてもやらずにいられなくなります。野球に燃えている子は、自ら野球への関心を深め、少々苦しくとも必要な練習をやるでしょう。英語に燃える、音楽に燃える、いろいろあつて結構です。どのスイッチがオンになるかです。できれば一つのことだけでなく、複数のことに燃えて欲しいものです。私の中に点火されずに埋もれている火種が、今も出番を待っているのです。

私たちは知識や情報や知恵や感情などの出入口を、ちゃんと開けておくことが大事です。いやな言葉が入ってきたとき、早くに出してしまえばよいのですが、出入口を閉じてしまふと、その言葉は出て行くことができず閉じられた中で濃縮し、毒となっていくきます。そして何かの拍子に口が開くと、暴力的に出てしまうことになりがちです。飲食・排泄も、呼吸も、出たり入ったりして健康です。私たちは、様々な情報にもとづく予断や偏見（自分では気づきません）、またパラダイム（見方や考え方のクセ）や無知によって、今出会っている大切なことの本当の意味や価値を見損なってしまうことがあります。あらゆるもの、今の自分の都合というところではかたからえられませんが、そしてその自覚もありません。そして、自分の知見を絶対視して、それを他に押しつけたり、そこから自他を判断し価値付けしてしまいます。教育は、人間を自由にするものでなくてはなりません。

たくさん出会って、たくさん気づき学んで、それを自分の中でつなぎ合わせて、そして自分の言葉や動きとして出してほしい。そのために、目も耳も心もオープンでありたいものです。まず、携帯メールから目を離し、ヘッドフォンから耳を解放し、わがままから心を自由に開くことを考えましょう。